

A string of colorful bunting flags and yellow circles is draped across the image. The flags are triangular and made of various patterned fabrics, including red, blue, green, yellow, and white. The yellow circles are placed between the flags. The background is a textured, light brown surface.

サンフランシスコのローカルパブで

ジョージ カックル

1980年代から90年代にかけて、僕はサンフランシスコに住んでいた。メキシコ人が多く住むミッション地区を見下ろす丘の上に、家はあった。

その頃、僕は家で仕事をしていたので、作業が終わると一杯飲みに出かけるのが日課だった。眼下にハイウェイ280号線を見ながら橋を歩いていくと、霧の中に赤いネオン管が光るパブが見えてくる。この頃、家の周りに住んでいる人々はほとんどが白人とゲイで、さらに丘の上に行くと、アメリカ系アメリカ人が住む黒人街。丘を降りると、メキシコ系地区のメイン通りであるミッションストリートがあった。

実はハイウェイができる前から橋がかけられたことで、そこに住む人たちの層が変わつていった。丘のある家は景色がいいから値段が上がり、富裕層のヤッピーやゲイが住むようになり、下の平らな土地はブルーカラー、つまり肉体労働者たちがそのまま住んでいた。そこにはメキシコ料理店やバーと共に、唯一、労働者階級の白人のアメリカ人が集まる小さなパブが残っていた。セントメアリーズパブ、そこは最後のブルーカラーで賑わっていた。

僕はそこでアメリカンバーボンウイスキーを飲みながら、多くの夜を過ごしていた。プライベートな聖域として、いつもひとりで行き、喧騒から逃れていた。その頃は撮影のコーディネイターをして

いたが、以前に自動車整備士をしていたことで、労働者階級の経験と、彼らの話し方に精通していたから馴染むことができていた。客はほぼ白人で、ジュニー・ムーンと呼ばれる小さなフィリピン人がひとりいた。

僕はいつもカウンターの端に座っていた。バーインナーのトミーから背中越しに「ハロー、ジョージ」と声をかけられれば、僕は「ハロー、トミー」と返した。トミーは大柄で、アメリカの西部劇で見るようなぼさぼさの髪をたくわえた男だった。彼は僕に生ビールのグラスを注ぎ、ワイルドターキーをショットグラスにあふれるほど注ぐ。グラスに口を運ぶと、彼はこぼれたウイスキーを拭き取る。チャイサーは水でなく、ビールだ。

僕はカウンターでほかの客の会話を聞いていた。彼らはいつも音を消したテレビから流れている内容について議論していた。客たちがビリヤードをするなか、アメリカンジュークボックスが当時のヒット曲を鳴らしていた。チャンネルがスポーツ中継なら彼らの意見を聞くのは楽しいが、夜遅くなるとテレビはだいたいニュースになった。

この時代は日本を非難する声が多く、アメリカの自動車工場の労働者は、同僚にアメリカ製品を勧めていた。ブルーカラーたちはいつも日本を批判していた。反日的なニュースが流れると、トミーは音量を上げてみんなが自分の意見を述べられるようにしていた。カウンターの常連として、僕も加わらなければならなかつた。彼らの会話に入った時は、日本をあまり強く擁護しなかつた。なにしろ、このバーにはカウンターの後ろに野球のバットが隠されており、下には物騒にも、ショットガン

がテープで固定されていた。僕はただ飲みに来た脅威のない白人男性でありたいと思っていたんだ。

そういえば、こんなこともあった。バーに初めて行った日から数年経ったころに僕は常連客となり、他の客の名前を覚えるようになっていた。そんなある日、隣の席に座っていた小柄な髪の男と一時間ほど話したことがあった。彼が立ち去るとき、デニムのベストに「ヘルズエンジエルズ、サンフランシスコ支部、副会长」と書かれているのを見て固まつた俺に、トミーは言った。「彼は近所の人だ、問題ないよ。」ヘルズエンジエルズといえば有名なバイクギヤングで、その悪名高い評判について聞いたことがあつたし、何よりそんな組織の副会长が身近なバーにいたことに驚いた。

僕は白人に見えるので、誰も僕の半分が日本人だとは思つていなかつた。ある日、京都出身の日本人ブルース・シンガーである日本人の友人と一緒にバーに行つた時のこと。カウンターの遠い端に座つて、飲み物を注文して会話をしていた。その時、トミーの笑顔が瞬間的に混乱し、なんとも言えないので顔になつた。しかしトミーは平静な顔をして、僕たちに飲み物を出した。その後、いつもよりチップをはずんで、僕たちは沈黙の中でバーを去つた。

数週間後、僕は勇気を持つてバーに足を踏み入れた。早い時間だったので、トミーだけがいた。そして僕にいつものウイスキーショットとビールを出し、カウンターに寄りかかり、顔をぐつと近づけて、他の誰もいないにもかかわらず、まるで誰にも聞かれたくないかのように、低い声で言つた。「なぜ日本語を話すんだ？」

実は半分日本人なんだと説明した。彼は長い間、僕を見つめ、「ああ、そうなのか」。彼はグラスを

洗つてカウンターを拭きながら、そう言つた。しばらくして、何人かの常連客が入つてきた。彼らはみんな不思議な顔をして、僕の方を見て、その後いつもの様子に戻つた。僕は立ち去るか、とどまるかを決めかねていたとき、日本を非難するニュースが流れた。常連のひとりがテレビに嫌悪の表情を浮かべ、日本の非難を始めると、トミーが言つた。ここではもうそういう話はよそう。あそこにいるジョージは半分日本人だ。でも俺たちの仲間だよな、と。

しばらく沈黙が部屋に広がり、僕は立ち去るべきか迷つたが、その男は長い間、僕を見つめ、そしてこう言つた。「そうか、そうなんだね？」それがセントメアリーズバブでの最後の日本非難だつた。アメリカもどこも同じで、人々は知らないものを怖がる。それは暗闇を恐れるのと同じだ。しかし、少しでも知る機会があれば、人々はそれを乗り越える。僕はその時、受け入れられ、同時に日本人も受け入れられた。

トミーは僕にもう一杯のウイスキーショットを渡し、「On the house!」（店からだよ）と言つた。

ジョージ カックル ラジオ・パーソナリティ。一九五六年鎌倉生まれ。幼少時代を日本、テキサス、韓国で過ごす。インドをはじめ世界各国を放浪し、十八年に及ぶサンフランシスコ生活を経て拠点を日本に移す。アメリカ、日本で多種多様な職業を経験したのち、音楽プロデューサー、コラムニスト、作詞家、サーファーとして多忙な日々を送る。現在はインターフォンや湘南ビーチFMで自身の音楽番組を持つ。著書に『ジョージカックルのWELL WELL WELL』（スローでメロウな人生論）『ジョージカックルの鎌倉ガイド』など多数、雑誌『ザ・サーファーズ・ジャーナル日本版』のマネージング・ディレクターを務める。